舞台監督研究室

発行　舞台監督研究室　2023 年 8 月 25（金）　第5号

トラブルシューティングは調教だ

多羅尾坂内

「トラブル」がイコール事故とばかりとは言えないのだが、ではなにをもってトラブルというのか。

舞台監督の観点からみれば、「主に公演の過程に支障をきたすと思われる出来事」ということになるだろうと思う。だから場合によっては疾病や喧嘩なども入るかもしれない。どちらかというと「アクシデント」の意味合いが強いかもしれない。

「シューティング」はトラブルに対する、対応・対策・対処・予防ということになるか。

トラブルの要因としては、外的要因・ハード面の要因・人的要因があげられる。外的要因はそのほとんどが現場での出来事が直接的な原因ではないことであり、演劇行為に限らないことでもあることから、それに対する対処も社会的に一定程度共有されているかもしれないので、ここでは取り上げない。

また、対人関係なども「トラブル」の範疇に入るかもしれないが、普遍的な問題なので「トラブルシューティング」で扱うにはふさわしくない（そもそも演劇はそこをあーだこーだ言っているともいえる）。

当然、起きてしまったことにはだれしも対処するのだが、トラブルシューティングということの難しさは、前述の「きたすと思われる」ところにある。思われるというのは「かも」ということでもあり、起きるか起きないか分からないからである（アクシデント）。

勿論、予測される事柄もあるが、多くは「何でもないときにとんでもないことが起きる」ので、事前に対応することが困難になっている。特にハード面など、原因がわかることについてはそれなりの対処法をつくることができるかもしれないが。

トラブルシューティングは一定程度いわばガイドラインとして機能しなければならないと思うが、現状ではなんとなく入ってくる情報をもとに、個別の感覚で対処しているのがほとんどだと思う。これでは情報も限られ結果も共有されずで、いつまでもたっても対策の道筋が作られないということになる。

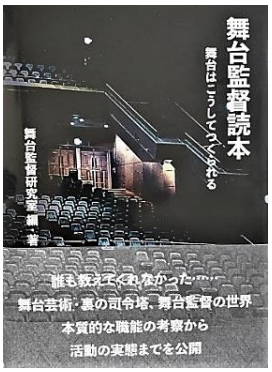
本来的には組織的に事例を収集し、検証を重ねることが大事とだれしも思うが、どうもうまくいっていないようだ。

ここでは最も扱いが難しい「ミス」について少し記してみる。もちろん不可抗力といえるものもあるのだが、原因が定かでないものの多くは広義の意味ではミスといえなくもない。

ミスの原因には時間制約、疲れ、無理、慣れ、技術力、確認不足などいくつもあるが、検証を重ねて頭に刷り込ませ、ミスを減らすようにしなければならない。

「ん、どうかな」と思っても、何とかなるだろうという、意識すらなく行為に至ってしまうことや、「ん、どうかな」とも思わずに事を行ってしまうこと（条件を理解しない、過信ということになるんだろうが）なんだけれど、先の原因と同様、事例と結果を周知して体に刷り込ませるしかない。

こんなことがあった、あんなことがあったというのを個人の段階にとどまらず、共有認識としても「あ、そういえば」という感覚がすぐ出てくるように、継続的に刷り込みのき機会が必要になる。



そこでその基となる事例の共有だが、これがいまだにうまくいっていないと思う。

一つは事例を収集する側が、いわば身内であるので、なかなか進まない。データベースを作って。サイトに事例をアップするという方法できればそれでもいいのだが。

報告するにも当事者を思いやることなどもあって、いささか逡巡する。自分のことでも、恥ずかしかったり、評価が下がることだったり、言い訳めいたりでなかなか言えない。笑い話で済むような話はよく出るが、重い事柄ほど表に出てこない。

そこでフォーマットをつくるにしても、あまり詳細に書き込まなくても伝わる方法がないだろうか。固有名詞や日にちは不要である。起きた場所と事柄が書かれていて、その結果が明記されていればよい。現状では具体的な組織名や個人名がある必要はない。かえって収集を難しくしてしまう。

トラブルは無くならない。どれだけ減らせるかの努力である。そのためには数多くの事例を体に叩き込んで(ちょっとした怪我でもよい)、予見する力を持つようにすることが現在できうることではないか。

と書いきながら思うのだが、事例の共有化とか、データベース化のようなことは昔から言われているのに、まったく進展していないので気が重いが、

私も含めて荷が重いことを痛感するし、やはり組織だってやらなければできないのではとも思うが、ではどこができるか。

現状では組織でもやはり荷が重いのではと思う。また進めるとあれダメこれダメの方向に行ってしまう危惧が、私の中では一番大きい。

また、先に過信と書いたが、体調含めてその行為を行えるかどうかを、自分自身をはじめとして、指摘できるかどうかが大事である。現場でお互いが意見を言える(注意できる)環境を作り上げることがとても重要なんだろうと思う。

そこで思い出すのが、先日の会合で指摘されたことであるが、例えばキューの関係でも、舞台監督がキューを出していても、実行はその担当者に任されるのだ、ということについてである。

キューが出ても危ない、まずいと思ったら担当者は実行しないのだから、キューは単に「GO」という意味だけでなく、「任せたよ」という意味にもなるということである。

私は今までこのことについて、あまり深く考えたことはなかったが、確かに自分が担当になったら、危ないと思ったら実行しないだろうなと思うと、キュー一つとってみても、いかに舞台監督と担当者との間に「任せる」任せられる」という関係性がなければ成立しないことがわかる。

最後に舞台監督の責任について云々されることがあるが、トラブルシューティングの体制がとれていないうえに、職責も定まっていないので責任問題に直結することはできない。法的なことも含め責任はとれないのではないか(ギャラも見合っていない)。「トラブルシューティング」を考えるには、まずもって切り離して進めたほうがいいのではないかと思う。いずれにしても、規制性から出発することのないようにしたいものである。

今まで書いたところはフリーの立場でのことであるので、会社に属していると問題が違ってくるのかもしれないが、その辺は残念ながら私はよく分かっていない。

さらに事故を防ぐ＝規制ということについて一言。事故を予防するということが規制性の非常に強いものになっているのではないか。昨今ヘルメット・フルハーネスが必須のものとなっているが、帯同は個人負担となっており、大きな負担となっている。着用前と後では事故発生率がどのように変わったか私は知らないが、効果はどうであろうか。脚立使用についてもなかなか難しくなっている。

コロナのことを含めて、最近は舞台作業に非常に時間と人手が必要とされるようになっているが、問題は規制に見合う体制をとれるプロダクションがそれほど多くないと思われることである。採算の取れない弱小劇団やアマチュア劇団の場を奪うことにならないだろうか。

まあ、個人的なインナーボイスとしては小うるさくて楽しくねーんだよ。

TSUBUYAKI

汚染水はどうせ捨てるなら東京湾に捨てておくれ。それができなきゃ国会を1F の隣にもってこい。毒水を海水で薄めて、同じ海に捨てるっていう理屈が分からん。しかもずーとだよ。終わりがないんだよ。今も汚い水は海に捨てているからいいいって理屈かね。これって日本だけ OK なの？ほかの国もみんなやったらどうなるのかね。汚染水を出すなよ。

北朝鮮が軍事衛星の打ち上げに失敗したようだけど、Jアラートを出して、なんか日本は臨戦態勢。全テレビ局が大本営発表よろしく全く同じ右へ習いの放送をしていたが、なんか独自の目線はないのかね。

口曲がりみぞうゆう大臣の麻生某が〝戦う覚悟をしろ〟なんて日本の植民地であった台湾でポロって言ったが、どうしようもないアホやね。あんた一人で戦いなさい。懐のない島国日本はミサイルの千発も落ちれば壊滅だわさ。

サン・シャン・ス

—編集後記—

酷暑お見舞い申し上げます。前号からだいぶ期間が空きましたが、すべて編集子の怠惰な性格によるものです。
今号は多羅尾氏に原稿を寄せていただきましたが、皆様のご意見、ご批判、身近な話題などがありましたらご投稿ください。
そうしないとまた私の怠惰な性格が大きく首をもたげることになります(ま、いいんだけど)。

舞台監督研究室　mikami3984@gmail.com
東京都江東区南砂2－25－7－905　文責 みかみつかさ